平成3年10月20日（日）

第１７回　越谷市民まつり

越谷市郷土研究会展示発表用資料

『大聖寺（だいしょうじ）の天保十年の庚申塔（こうしんとう）』

越谷市郷土研究会理事　加藤幸一

『赤山（あかやま）街道と陸羽（りくう）街道の道しるべ』

越谷市郷土研究会理事　山崎善司

越谷市郷土研究会の案内

- 昭和４０年３月に発足
- 年間３回の『研究発表会』、年間８回の『史跡めぐり』を実施
  そのお知らせは「広報こしがや」に前もって掲載されます。
  どなたでも自由に参加できます。
- 古文書クラブの学習、市民文化祭への参加等の活動を実施

大聖寺の天保十年の庚申塔

加藤幸一

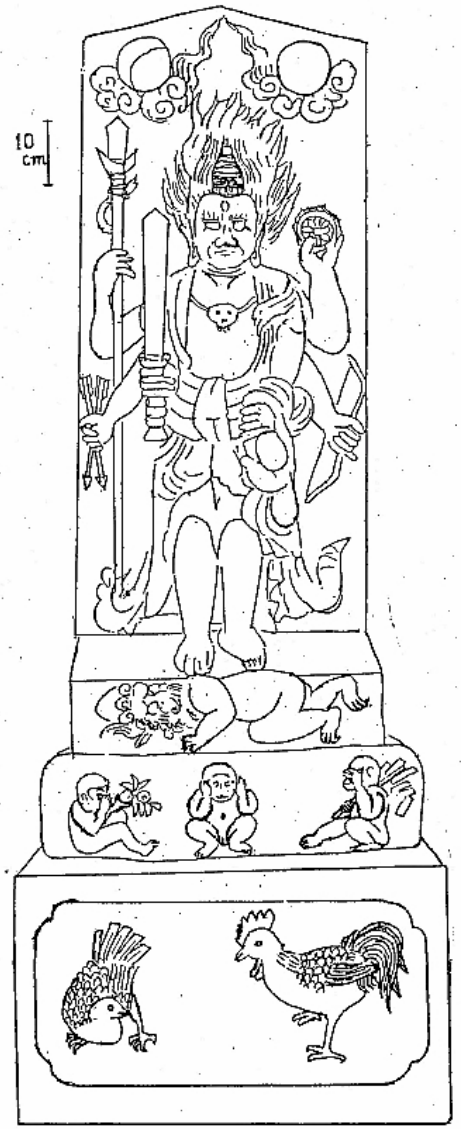
大聖寺の庚申塔と言うと「百庚申」を思い浮べることでしょうが、ここでは其れとは別の庚申塔を紹介する。

庚申塔は江戸時代の庚申信仰の名残りとして市内でも到る所に見られる。庚申信仰とは、体の中に潜んでいる三尸虫（さんしちゅう）が六十日に一度やってくる庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から脱け出て天に昇り、その人が日頃犯した罪を天帝に暴く。するとその報告を元に判断して若死にさせたりする。それ故、庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならない。そこで庚申講の仲間達が一堂に会し、徹夜して過ごす「庚申待（まち）」という行事が行われる。その記念として建立された石塔が庚申塔という訳である。かつては全国津々浦々で盛んに行われたが、明治になると急に衰頽する。

庚申塔の型式は様々あるが、大聖寺（大相模の不動尊）境内にある天保十年の庚申塔のように元禄の頃に完成した「日月・青面金剛・二鶏・三猿」の基本形が代表的である。大聖寺の天保十年（一八三九）の庚申塔は、上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央の六本の腕を持つ青面金剛は頭髪は炎のように逆立ち、その中にとぐろを巻き鎌首をもたげた蛇らしき物が見られ、目は三つ目となり忿怒の形相をなしている。胸には髑髏の首飾（環珞）がある。又、各手には弓と矢や輪宝（矛先が八方に出ている）・矛・剣を持ち、女人の髪の毛を掴まえてぶら下げている。男尊女卑の現れである。但、女性の顔が約百五十年間の風雨に晒されて磨滅しているのが残念である。尚、三つ目と髑髏の環珞が描かれているのは珍しい。この二点は「陀羅尼集経」で説かれている通りとなっている。この経典に説く青面金剛の姿・形とは一部を砕けた表現で訳してみると次の通りとなる。

身体には四本の腕があって、上の左手には三股叉を下の左手には棒を持ち上の右手には輪宝を下の右手には羂索を持つ。身体の色は青色で、口を張って牙を出し、真赤な目をして三つ目となっている。頭の上には髑髏を載せ、髪の毛は炎のように逆立っていて大蛇を巻き付かせている。両腕からは竜を一頭ずつぶら下げていて、それらの竜の頭は互いに向き合っている。腰には二匹の大きな赤蛇を纏っている。髑髏の環珞（首飾り・胸飾り）を首に掛けている。両脚の足下にはそれぞれ鬼を踏み潰している。

一身四手。左辺上手把三股叉。下手把棒。右辺上手羂索。下手把輪。其身青色。面大張口。狗牙上出。眼赤如血面有三眼。頂戴髑髏。頭髪竪如火焔色。頂纏大蛇。両腕各有倒懸一竜。龍頭相向。其像腰纏二大赤蛇。両脚腕上亦纏大赤蛇。所把棒上亦纏大蛇。虎皮裙跨。髑髏環珞。像両脚下各安一鬼。



高さ約158cm

青面金剛の足下には天の邪鬼と呼ばれる鬼が踏み潰されている。この庚申塔の鬼は手足の指がそれぞれ三本しかないのがおもしろい。その下には三猿がある。向かって右端は御幣を持つ見ざる。御幣は神の依代である。左端は性欲の強い動物とされている猿が女性の陰部を連想させる桃を持つ聞かざる。桃持ち猿は庶民の間では子授け・安産・下（しも）の病の祈願の対象となっていた。中央の言わざるの猿は臍がみられ、その下の陰部も表わされていて雌猿とわかる。今と違って当時の性に対するおおらかさが窺われる。殆どの庚申塔は見ざる・聞かざる・言わざるを唯刻んでいるだけであるが、このように描かれているのは珍しい。二鶏（雄・雌）は普通は青面金剛の下部の両脇に描かれていて、中には何の鳥か判明できない程に簡略に線刻されていたり、或いは全く刻まれていない物まで見られる。それがこの庚申塔では三猿の下に独立してあり、しかも細部まできちんと描かれていて珍しい。

以上からこの庚申塔は天保期のものと言え、江戸時代の庶民信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にもすぐれ、他には見られない庚申塔であると信じており、何らかの方法で後世の人々のためにこれ以上風化しないように是非保存してもらいたいものだと願っています。

赤山街道と陸羽街道の道しるべ

赤山街道

赤山街道は、承応三年日光街道が正式に制定、日光奉行が置かれた頃、安行の赤山陣屋より、伊奈家が最短距離の道を、四方に向け造ったのを、今も赤山街道と云う。

勿論、日光街道越ケ谷宿に通ずる道で、伊奈陣屋辰の口より、越ケ谷宿中町迄が赤山街道と云う、越ケ谷新石三丁目と中町との境の道でもある。

庚申塔は、日光街道越ケ谷宿中町側分岐点に建られたものであるが、今は、有龍達雄氏同地内、箕輪桑三郎氏宅に移り建っている。

庚申塔　道しるべ

一、種別　庚申塔
一、所在地　越谷市越ケ谷中町　小松石　八の二〇　箕輪桑三郎氏宅地内
一、形態　台座高サ一五cm巾　中台高サ二〇cm巾　柱塔高サ七〇cm・巾　正面　四七〇cm奥　四七五cm奥　中台座　四八cm奥　中台座　四八cm

一、碑銘　正面　萬延元□□□□　雲図庚申塔　左側　大さがみ　此方はとがや　裏側　此方の　右側　だ

三猿像刻　よし川かわぐちなりたほうしばな　中台座　町道　道

庚申塔　＝猿田彦神を祀り（神道）、青面金剛を祀る（道教）。

◎　猿田毘古神（サルタヒコノカミ）・猿女君（サルメノキミ）とも云い、天之八衢（アメノヤチマタ）八道の辻・分岐点に居て、高天原と下の葦原中国を照らしている岐の神。

◎　青面金剛（セイメンコンゴウ）、病魔・病鬼を払い除く力を持つ、庚申会の本尊として祀る。寿命を司るとも云う。

猿田彦神　（神道）

「日本書紀」
「天孫、邇邇芸命が豊葦原中国に降臨した時、天之八衢（八方の道の辻・分岐点）に居て、高天原と下の葦原中国を照らす神」が居た。

猿田彦の事を「鼻の長さ七咫（ナナアタ）、背の高さ七尺余、又口尻明るく輝けり、眼は八咫鏡の如くにして、照り輝くこと酸醤（ホウ

ズキ）に似たり」と描かれている。

「邇邇芸命の父天神」は、天宇受売命（アメノウズメノミコト）に命じて「吾が御子（邇邇芸命）の天降りする道を遮切るのは誰か」と問われた、すると「吾れは、猿田彦と申す、天津神の御子が天降りされると聞き、御先導申上げ様と、此処迄出迎えに来たのだ」と答えた。

其処で、邇邇芸命（ニニギノミコト）は、猿田彦命に案内を命じた。

「猿田彦命」は、道案内の神、岐の神、子孫は、芸道の神でもある。

八衢（ヤチマタ）で、猿田彦神に初めて逢った時、鈿女命（ウズメノミコト）は、胸乳を露わにし、裳帯（モヒモ）を臍の下に垂れて居たと記して有るので、性的所作を以て、接待したのであろう。

猿田彦神は、後に鈿女命（ウズメノミコト）と婚姻する事に成るので、此の辺の伏線が、猿田彦を心服させたものと考えられる。

尚、祭礼の御輿の先導に、立つ高鼻の赤面を付けた、猿田彦神は、現在でも良く知られている所である。

青面金剛と庚申

青面金剛（庚申）を祀てある塔で、庚申塚等に各年代の青面金剛像・青面金剛題目・庚申塔・庚申題目・申待等の塔を見る事が出来る。

因に、江戸時代の庚申年は、元和6年（一六二〇）・延宝8年（一六八〇）・元文5年（一七四〇）・寛政12年（一八〇〇）・嵩延元年（一八六〇）となり、此の年に、青面金剛、又は、庚申塔が建てられているものが多い。

青面金剛（セイメンコンゴウ）

顔の色が青い金剛童子、大威力が有り、病魔・病鬼を払い除く。

六臂・三眼の忿怒相をしている。

世俗民間で行われている「庚申会」の本尊で猿の形相をしている。

庚申待

「庚申」の夜、帝釈天・青面金剛を祀る。（神道では猿田彦）当日は、徹夜をする習俗である。

其の夜眠ると、人身に居る、三尸（サンシ）の虫が、「人の眠りに乗じて、其の罪を上帝に告げ口をする」と云われる。

三尸の虫は、人の寿命を司ると云われ、其の罪により人の命を短くすると云う。

中国の道教の中の「守」に由来するもので、「禁忌」である。

平安時代に、日本に伝わり、江戸時代に盛となる行事で、「庚申」・「庚申会」・「庚申祭」・「庚申待」・「申待供養」とも云う。

陸羽街道と山の神

陸羽街道

陸羽街道の出来た年代は不詳だが、奈良朝時代からのものと思われる。その街道の通りを辿ると、久伊豆神社・観音堂・薬師堂・浅間神社等、古代からの神社仏閣の前を、縫う様に通る古道である。

徳川家康の初期時代には、「奥州街道」と称したが、所処手を加え街道を整備されたので、古陸羽街道とは、多少道筋が異なる箇所がある。

「陸羽街道」は、尾竹橋より荒川を渡りて、北千住桜木町に至り、元千住神社の前を、今の荒川放水路を斜めに六月町を経て、大原に至る。

大原で左折し、下妻街道と分岐し、北に向い、八条・別府・南百に至りて西に向い、大相模・瓦曽根の久伊豆神社（今稲荷）にて、左折照蓮院・観音堂にて右折して越ケ谷宿に至る。

越谷境の道標を左に、左折して東光院薬師堂前を右折して進むと（今野地道）、澄海寺・八幡神社を経て、越谷小学校脇て、赤山街道に交わる。

此処に「山の神」が祭られており、小学校添いに左折すると、浅間神社脇を通り、稲荷前にて左折、愛宕神社（今四丁野旧会田太郎兵衛屋敷内）前を通り四丁野村（今宮本町）に至る。

此の道が、古道陸羽街道と云われる唯一の証拠が、此の「山の神」石碑で、赤山街道と交わる辻に、祀られて居る所以である。

其の後、徳川家康の入部後、河川改修に伴い、街道の付け替えが、所処に行われて、名も奥州街道と改められた。

大山祇命（オオヤマズミノミコト）

伊弉諾（イザナギ）・伊弉冉（イザナミ）皇神の子と記されている神。

大山祇神は、神々を統合し束ねる神で、此の神は、大山積とも、大山津見・又の名を和田志大神と云われる。

「大山祇神」は、「山と海を司る神」である、赤山街道と陸羽街道との交叉点に、建てられたものと思われる。

山の神　辻の神　境の神

大山津見とは、大山に住む、即ち、大山を司る神で「山の神」である。

「山の神」は、大山祇神（オオヤマズミノカミ）を祀る、境の神・道の辻・分岐点の祀神でもある。

此処に掲げる、「山の神」の写真は大変珍らしいもので、越谷市金石資料集にも記載されて居無いものである。

同系の神としては、「塞の神」（サイノカミ）がある、越谷市内には、九例を見る。防塞の神で、疫病・悪霊等を村境にて防ぐ神である。

山の神

一、種別　山の神　自然石
一、所在地　越谷市越ケ谷　3の2の10　森田衛氏宅　地内
一、形態　高サ58cm　巾41cm　奥23cm
一、碑銘　山の神（辻の神・境の神）
一、年代　不詳

寿命の神

大山祇神は、人間の寿命を司と云われる。

又、生者と死者との世界を分ける境を司る神で、生者＝人間界と死者＝幽冥界との境を支配する神である。

大山祇命の娘姉妹、石長媛と木花開耶媛を天孫邇邇芸尊に奉ったが、尊は、美女の木花開耶媛を妃にして、醜女の石長媛を嫌って戻した、其の為に、天皇家の寿命が花の如くに短いのだとの話がある。

酒造の神　造酒の祖神

大山祇命は、穀物から酒を造った始りである所から、大山祇命と木花開耶媛を酒解る神と呼び、造酒の祖神としている。

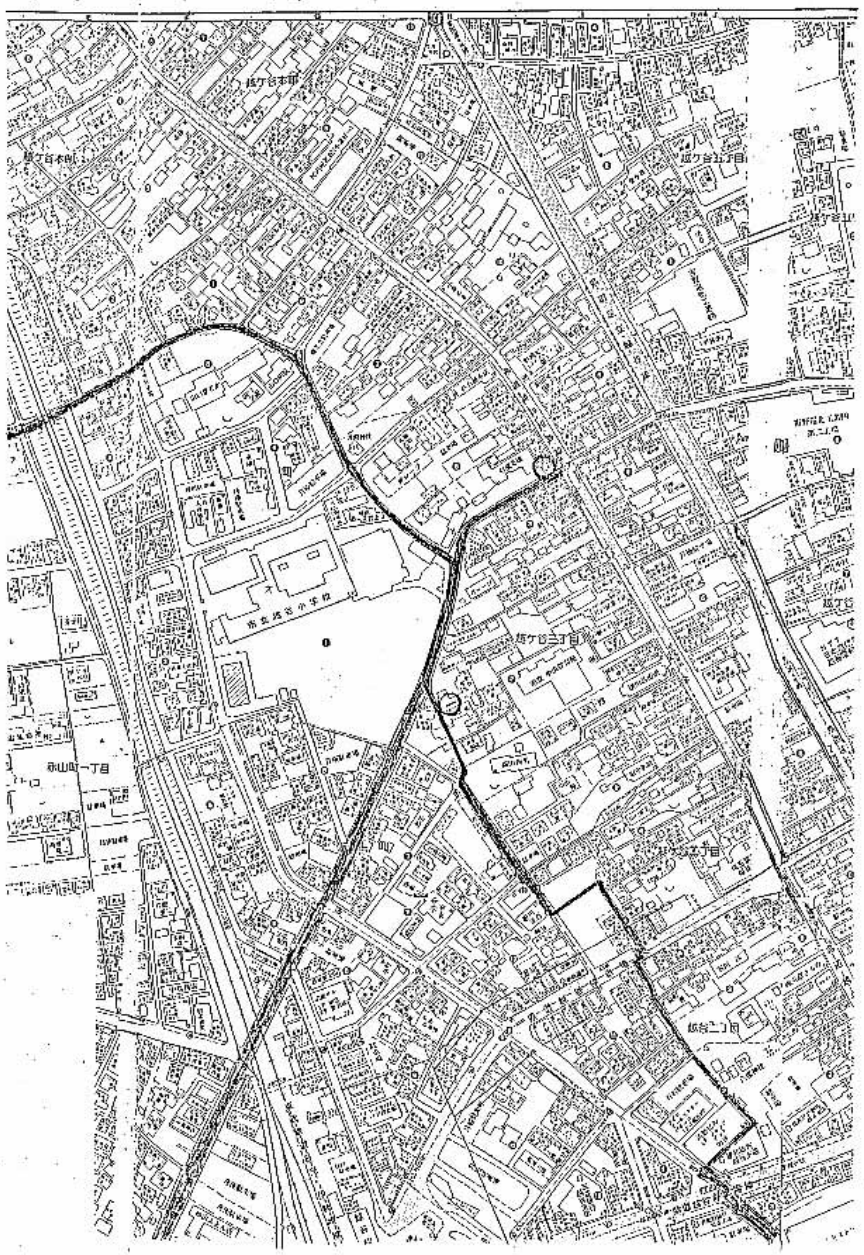
木花開耶媛が彦火火出見尊を産み奉ったので、父神の大山祇神は、大変嬉び、猿名田の茂穂で、天甜酒（アマノタムサケ）を造り、天地の神神に捧供したと云う話がある。

海の神　和田津見神　武の神

和田志大神の「和田」は、「綿津見」（ワタツミ）で、海神の「わた」で、海を意味し、海を司る神で「海の神」である。

故に此の神を祀る本源の神は、大山祇神社（大三島神社）の社伝には、海山兼備の神であるとしている。

又、大三島の地は、芸予海峡にあり、山陽・南海・西海の三道航路の要衝である為、大山祇神社への参拝者は多く、武門の守護神として武士にも信奉された、特に、水軍の崇敬は熱烈であった。

全国各地の大山祇神社・大三島神社には、大山祇神・又の名、和田志大神が祀られ、各地の此れ等の神社には、国宝・重要文化財の武具類が多く奉納されている。

以上